

# 浜頓別町クッチャロ湖畔遺跡と豊牛遺跡について

～新岡武彦採集資料を中心として～

乾 茂年

浜頓別町教育委員会 〒098-5792 枝幸郡浜頓別町中央南1

## はじめに

オホーツクミュージアムえさしでは、新岡武彦氏が各地で収集した考古遺物を所蔵している。新岡武彦氏は、考古学者として北海道各地の遺跡を廻り調査を行い様々な論考を残している。その新岡武彦氏が収集した資料の中には、浜頓別町の遺跡から表面採集した資料もあるため、今回はその資料の一部を紹介する。

資料はクッチャロ湖畔遺跡（1点）と豊牛遺跡（9点）の2遺跡で表採したもので、総数10点である。今までそれらの遺跡の報告は一部しかなく、遺跡の性格や内容が分からなかった部分がある（大場・管, 1977; 平川, 1995）。そのため、資料の紹介を通し遺跡の性格を明らかにしたい。

## 1. 遺跡の位置と時期について（図1）

まず表面採集した2つの遺跡について位置や時期等を概略的に述べる。その中で豊牛遺跡に関しては、浜頓別町で所蔵している遺物についても紹介を行う。

### (1) クッチャロ湖畔遺跡

遺跡はクッチャロ湖東岸台地の標高10～20mの地点に位置し、時期は縄文時代前期・中期・晩期及び擦文時代である。特徴として北海道のオホーツク海側では3例しかない縄文時代前期～中期にかけての貝塚が形成されていることや擦文時代の竪穴式住居跡が173軒存在するなど、各時代を通して長期的に利用をされてきた場所である。またこの遺跡は浜頓別町でも数少ない本格的に発掘調査を行った遺跡としても有名である（昭和33・34年に調査）。その後昭和41年に北海道の史跡に指定されている。

### (2) 豊牛遺跡

遺跡はおよそ頓別と斜内の中間に位置し、国道238線からやや内陸側の砂丘の標高6～9mの地点に存在する。時期は縄文時代中期・後期及び擦文時代である。遺構としては擦文時代の竪穴式住居跡が133軒確認されている。この地域では海岸に沿うように南北へ広がる砂丘上に他の遺跡も立地しており、時期もおよそ同様であることから大規模且つ長期的な土地利用がなされてきたことが想定できる。

図2は当該遺跡の資料である。1は胎土に繊維を含まないことから、縄文時代後期初頭の北筒Ⅱ式（トコロ5類）土器である。2は擦文時代後期～晩期の小型長胴深鉢である（塚本, 2002）。口縁部は綾杉文（刺突に近いものもある）を、胴部は鋸歯文及び横走沈線を施文する。3は両頭石槍である。両頭石槍は集成が行われているが、全道的に出土数が少ない上に、時期が同定できる良好な出土状況も少ない（立川, 1998）。しかし傾向として縄文時代中期の遺跡に伴うことが多いようである。そのため1の北筒式土器の時期に製作されたのではないかと考えられる。枝幸町においても落切川左岸遺跡で3点出土しているが、浜頓別町の資料と比較するとサイズや形態に差異が見られる（図3）。それらの違いは時期差や地域差によるものなのかは今後の検討課題である。

## 2. 新岡武彦資料について（図4・5）

新岡武彦資料はすべて、図4・5に集約した。図4は全て石槍で、器形の違いによって3群に分けられる。I群（図4-1～3）は有茎の石槍である。

1はクッチャロ湖畔遺跡のもので、2・3は豊牛遺跡のものである。遺跡の時期が近いから形態やサイズ、調整まで大きな差異は見られない。しかし、1の調整は他のものと比較すると整えられており器厚も薄い。Ⅱ群(図4-4~7)は柳葉形の石槍で、刃部の2次調整の違いからさらに2つに分類することが出来る。Ⅱa類(4・5)は2次調整時に、刃部全体を一方向から均一に調整を行うため断面がレンズ状ないしは三角形状を呈し、刃部も直線に近い。Ⅱb類(6・7)は刃部の2次調整が器形の上下で分かれ、対角線上に調整を顕著に行う。そのため2次調整を行っている箇所は、断面が鋭角になり平行四辺形状の形を呈するとともに、刃部が緩いS字のカーブをえがく。Ⅱa類の断面はⅠ群の断面と同じ調整方法であることから石槍としての使用が想定される。しかしⅡb類に関しては調整方法が他と異なるため、削器であるナイフと同じような機能があった可能性も指摘できる。Ⅲ群(図4-8)は無茎の石槍である。平面形が二等辺三角形に近い形を呈し、基部まで調整を行っている。器形や基部の調整だけ見ると道央・道南地方で出土している石筥に類似する。しかし、道北部での報告事例はなく、刃部の作出や先頭部の鋭さなどを加味した場合、石筥ではなく石槍等の尖頭器であると考えられる。基部の調整は5のような石槍が整形段階で失敗し折れたため調整し直したか、狩りなどの使用の際に折れたものをメンテナンスし再利用したものと想定される。

(図5-1)は横型石匙(摘み付ナイフ)である。刃部の先端が調整時によるものか折れて破損している。

(図5-2)は両面調整石器である。平面的には石槍などに近いが、基部が折れているため未成品の段階である可能性が高く、器種の同定が困難である。

以上が新岡武彦資料の紹介となるが、今回は石器の分類に重点を置き記載したので、詳細な法量などは表1にまとめた。

### 3. 遺跡・遺物の傾向

今回紹介した遺跡の遺物は発掘調査を行った際のものではなく、表面採集資料であるため資料に偏りが生じる。そのため遺跡全体の石器組

成がわかるわけではなく、遺跡の性格や生業に関することなどを示すものにはならない。

紹介した縄文時代中期後半~後期初頭の北筒式の遺跡の傾向として、石器組成に占める尖頭器の割合が高く全体の半数を超える場合もあると指摘されており、また石槍の大型化が目立つと指摘されている(宇田川, 1988)。その要因としては、寒冷化が起こり自然の生態系に変化が起こったこと(新美, 1990)や、生業活動での狩猟活動の比重の変化(高倉, 2011)、シカ・海獣類といった中・大型獣の狩猟が重要な生業として位置づけられるようになったためなど指摘されている(宇田川, 1988; 新美, 1990)。

それらの傾向を踏まえて今回の資料を改めて確認すると、表面採集資料だがそのほとんどが直接生産用具の尖頭器であることが分かる。遺跡では一般的に尖頭器以外にも削器や搔器、敲石、すり石などの遺物が出土する。表面採集時に遺物の選択を行っていなかった場合、尖頭器の比重が高かったことが想定される。そのため指摘されている傾向に即する可能性がある。しかし、もう一つの傾向として指摘されている石槍の大型化については、前後の時期の石槍と比較を行っていないため何らかの傾向を掴むことはできなかった。

### おわりに

今回資料紹介を行うことによって、若干ながら遺跡の傾向を指摘した。しかし表面採集資料であるため不確定なことが多いことや、資料数が少ないこと、遺物の変遷の傾向を把握出来なかったことなど、いくつか課題が浮き上がってきた。そのため今後は浜頓別町に所蔵されている未報告のクッチャロ湖畔遺跡と豊牛遺跡の資料を確認・報告を行うとともに、時期が前後する他の遺跡と比較検討を行うことによって、浜頓別町の遺跡・遺物の傾向を出していけたらと考えている。また現在、名古屋大学と協同でクッチャロ湖畔遺跡の縄文時代前期~後期の貝塚の調査を行っている。そのため今後浜頓別町での動物骨から見た当時の生業の実態について把握出来るのではないだろうか。

## 参考文献

- 宇田川洋, 1998; 筒形土器の動の文化. アイス文化成立史. 北海道出版企画センター
- 大島秀俊, 1992; 5 遺物の分類. チブタシナイ3遺跡. 小樽市教育委員会
- 大島秀俊・泉静香・本間有紀, 1995; c 遺物の分類. 千歳市オサツ15・16遺跡. 北海道文化財保護協会
- 大場利夫・管正敏, 1977; 枝幸郡浜頓別町日の出遺跡調査報告. 北海道考古学13. 北海道考古学会
- 加藤晋平・鶴丸俊明, 1980; 石器の分類の方法と製作工程. 図録石器の基礎知識 I 先土器(上). 柏書房
- 金子浩昌・西本豊弘, 1985; 北海道・本州東北におけるオットセイ猟の系譜. 季刊考古学11. 雄山閣
- 工藤研治, 2008; 北筒式土器. 総覧縄文土器. 株式会社アム・プロモーション
- 熊谷仁志, 2001; 北海道の縄文土器. 新北海道の古代1 旧石器・縄文文化. 北海道新聞社
- 佐藤隆広・高島孝宗, 1999; 落切川左岸遺跡発掘調査報告書. 枝幸町教育委員会
- 鈴木道之助, 1980; 石器の形態と分類. 図録石器の基礎知識III 縄文. 柏書房
- 高倉純, 2011; 石器からみた縄文から続縄文時代の変容—両面調整石器製作工程の検討を中心に—. 北海道考古学47. 北海道考古学会
- 武田修, 2000; 常呂川河口遺跡(2). 常呂町教育委員会
- 立川トマス, 1998; 両頭石槍について. 時の絆道を辿る. 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編
- 塚本浩司, 2002; 擦文土器の編年と地域差について. 東京大学考古学研究室紀要17. 東京大学
- 平川善祥, 1995; 浜頓別の先史時代. 浜頓別町史. 浜頓別町町史編集委員会
- 三浦孝一, 2004; 4 遺物の分類. 浜松3遺跡. 八雲町教育委員会

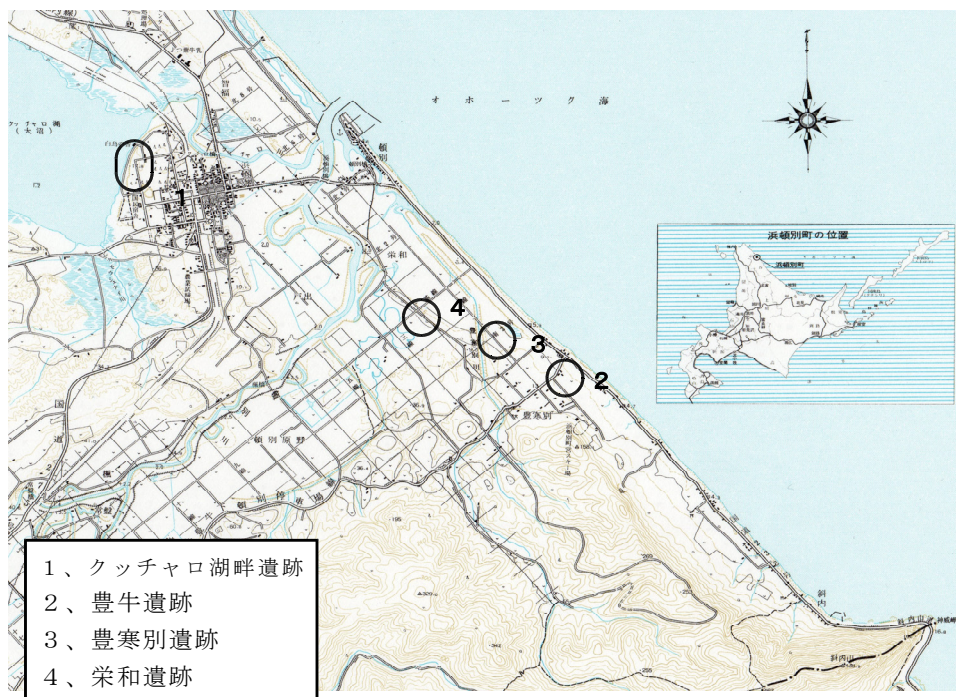


図1 遺跡分布地図

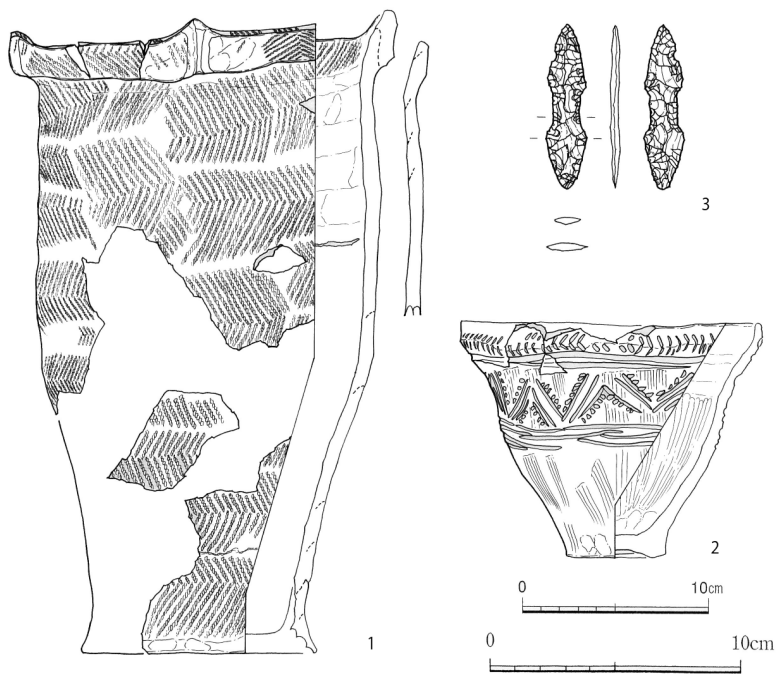
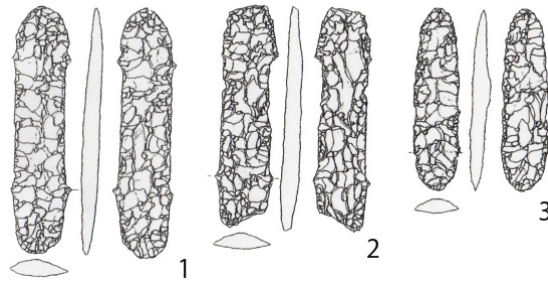


図2 豊牛遺跡出土遺物（1はS=1/4、2・3はS=1/3）



(S=1/5)

図3 落切川左岸遺跡出土両頭石槍（枝幸町教育委員会1999より一部改編）

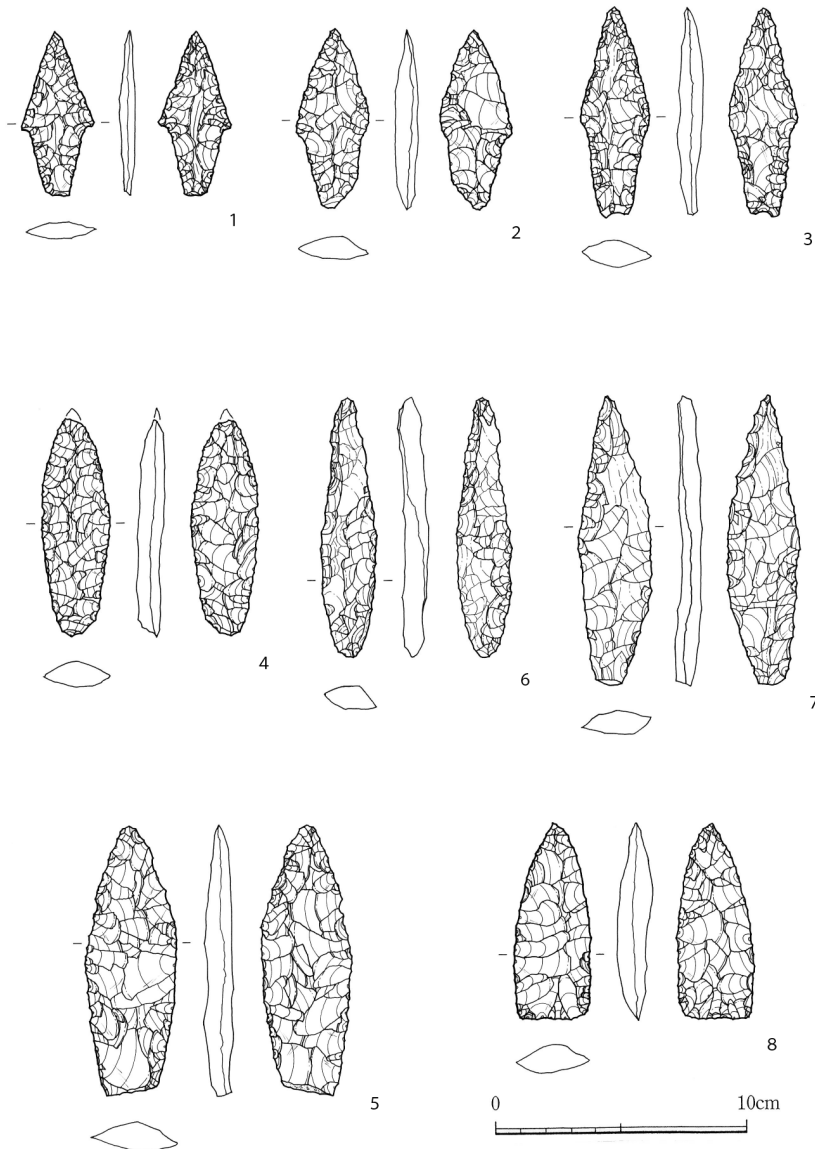


図4 新岡武彦資料1 (S=1/3)

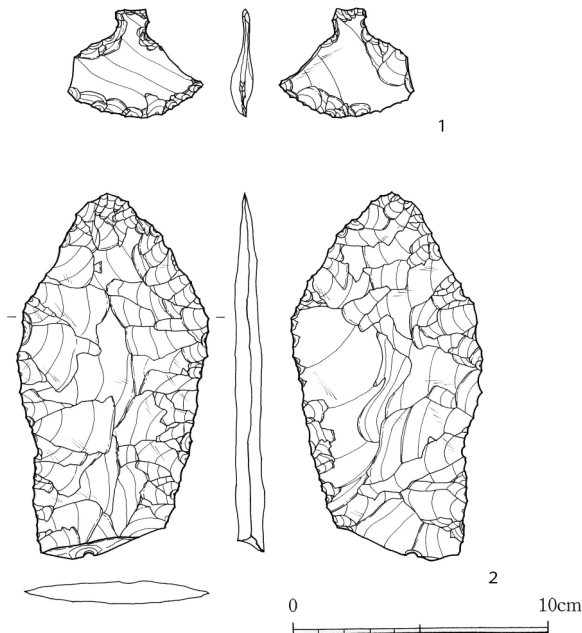


図5 新岡武彦資料2 (S=1/3)

表1 資料計測表

図版番号	遺跡名	器種	時期	長さ(器高さ)	幅(口径)	厚さ(器壁)	調整	石材(胎土)	色調(比率)
図2-1	2	深鉢	II	32.80	20.50	0.70	内:ナデ	1mm以下の白色鉱物を多量に含む	暗黄褐色
				31.20	19.50		外:羽状縄文		
図2-2	2	小型長胴甕	III	8.90	12.00	0.45	内:ナデ・磨き 外:ナデ・ハケ	1mm以下の白色鉱物を少量含む	淡い橙色
図2-3	2	両頭石槍	I	6.15	1.60	0.30	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=4:0
図4-1	1	石槍(I群)	I	6.30	2.80	0.60	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=4:0
図4-2	2	石槍(I群)	I	6.90	2.80	0.85	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=2:2
図4-3	2	石槍(I群)	I	7.80	2.70	1.00	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=4:0
図4-4	2	石槍(II群a類)	I	8.30	2.65	1.00	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=4:0
図4-5	2	石槍(II群a類)	I	10.20	3.60	1.05	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=4:0
図4-6	2	石槍(II群b類)	I	9.90	2.15	0.90	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=1:3
図4-7	2	石槍(II群b類)	I	11.10	2.90	0.85	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=3:1
図4-8	2	石槍(III群)	I	7.50	3.10	1.10	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=4:0
図5-1	2	横型石匙	I	4.40	5.10	0.40	剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=1:3
図5-2	2	両面調整石器	I	14.80	7.30	0.90	両面剥離調整	黒曜石(白滝産)	黒:茶=4:0

※遺跡名はクッチャロ湖畔遺跡が1, 豊牛遺跡を2と記載。

※時期は縄文時代中期後半～後期はI, 縄文時代後期初頭がII, 擦文時代はIIIと記載。

※長さ～厚さまで単位はcm. また北筒式土器のみ口縁が波状のため測定値を2つ記載。

※石器の色調は黒と茶の比率で表す(黒:茶=2:2であれば黒と茶は同量程度みられる)。



写真1 北筒式土器（豊牛遺跡出土）



写真2 擦文式土器（豊牛遺跡出土）

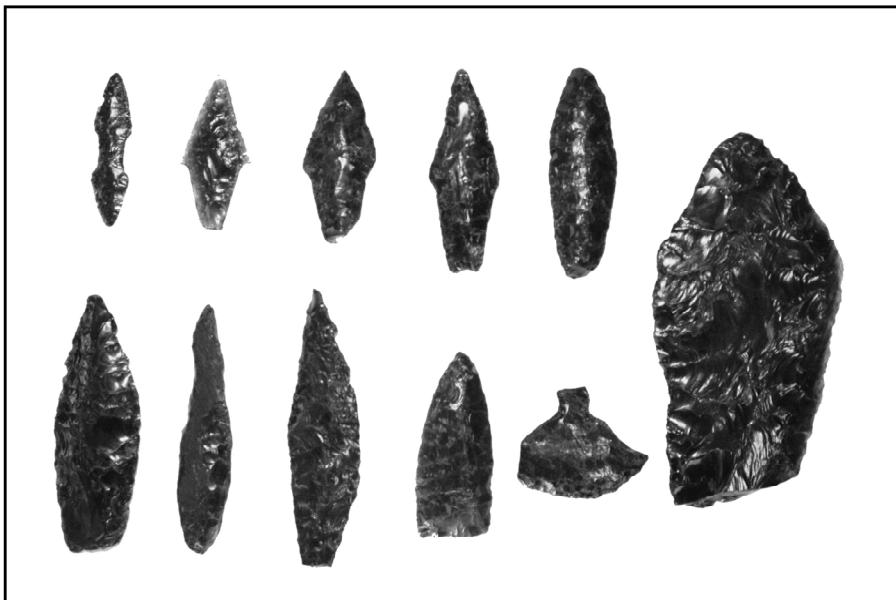


写真3 クッチャロ湖畔遺跡・豊牛遺跡の石器資料